

Cure to Care

第 7 話

與儀 達朗

【登場人物】第7話

\* 前作までの高井の表記は高井玲奈に変更。

町田 翼（32）： 救急・訪問診療医

村井 正和（50）（35）： 訪問診療所院

長

五十嵐 隼人（28）： 訪問診療所アシスタ

ント

山崎 香織（40）： 介護福祉士

八木 直久（50）（35）： 救命センター

部長

高井 玲奈（30）（15）： 救命センター

看護師

ケン（40）（55）： 村井と八木の上司、

救急医、訪問診療医

石原 翔（37）： 外科医

北島 美佳（38）： 訪問診療所アシスタ

ト

救急隊員 A ( 2 5 )	：	救急隊員
運転手 B ( 6 0 )	：	接触事故の運転手
運転手 A ( 4 5 )	：	接触事故の運転手
警察官 A ( 3 5 )	：	警察官
笹倉 ( 7 5 )	：	入院患者
青木 ( 4 5 )	：	救急隊長
村上 ( 5 0 )	：	居酒屋店主
覚知 ( 3 5 ) ( 5 0 )	：	居酒屋店員、店主
山田 ( 2 9 )	：	町田の後輩の救急医
新井 ( 2 9 )	：	町田の後輩の救急医
酒井 美世 ( 6 5 )	：	八郎の娘
酒井 八郎 ( 9 0 )	：	居宅患者
高井 夏美 ( 4 1 )	：	高井の母親
北川 彩 ( 3 3 )	：	当時の村井の彼女
西川 直子 ( 5 0 )	：	カメの娘
西川 カメ ( 7 5 )	：	局宅患者
松永 苑子 ( 6 0 )	：	ケアマネージャー

救急隊員 B (25) : 救急隊員

患者 A (50) : 搬送患者

看護師 A (40) : 前田救命センター 看護師

看護師 B (35) : 前田救命センター 看護師

【あらすじ】（第7話）

15年前。前田救命センターで救急医として勤務する村井は、同期の八木と上司のケンと救急搬送患者の対応に明け暮れていた。ケンは来る高齢化社会、医療難民の問題から訪問診療所の開設を村井に打ち明け、村井も非常勤医師としてケンの診療所の手伝いをすることになる。ある日、村井が経過観察していた発熱患者の状態が悪くなり、ケンが患者宅に往診へ行くことになるが……。

第7話 「村井訪問診療所」

（回想はじめ 15年前）○前田救命センタ

ー・初療室（夜）

初療室の救急カートの上に挿管の物品を急いで並べている村井正和（35）。村井は焦った表情をしている。初療室のベッドには患者が寝ており、患者の足下で薬剤のシリンジを握っている八木正和（35）。八木が村井に目をやる。

八木 「いけるか？」

村井が八木を見て頷き、喉頭鏡を持って患者の頭元に移動する。目が泳いでいる村井。

（回想終わり）

○村井訪問診療所・外観

曇り模様の空。『村井訪問診療所』の看板が立っている。玄関から村井正和

(50) が傘を持って出てくる。停めていた車に乗り込む村井。

○車内・運転席

雨の中、車を運転している村井。視界の先に車の接触事故の現場が映る。左車線脇に二台の車が停まっており、雨の中、警察官 A (35)、運転手 A (45)、運転手 B (60) の三人が外に出て話をしている。二、三秒ほどその光景に目をやっていた村井だが、すぐに正面に視線を戻す。

○車内・運転席

信号待ちで村井の運転する車が停車している。対向車線を緊急走行の救急車が走り去る。

(回想はじめ 15年前) ○前田救命センター

1・正面玄関

T 「15年前」

八木が立っている。

正面玄関に一台の救急車が停車する。

救急隊員A（25）が運転席から降りてきて、救急車の後ろの扉を開ける。

救急隊員B（25）が懸命にストレッチャーの上に寝ている患者A（50）に心臓マッサージをしている。頭元でマスク換気をしている救急隊長の青木（45）。救急隊員Aがストレッチャーを外に出す。

八木 「心停止してからどのくらいですか？」

青木 「30分です。ショックに反応しません」

八木は移動するストレッチャーの頭元に回り患者Aの瞳孔をチェックして、青木からマスク換気を代わる。

○同・初療室

患者Aを乗せたストレッチャーが初療室に入ってくる。八木がマスク換気を

している。八木の視線の先には、ケン（40）と村井が立っている。

八木「頭、まだ生きていそうです」

ケンが八木を見て頷く。

ケン「よっしゃ、E C P Rでいくぞ、村井」

T「E C P R…人工心肺を用いた心肺蘇生法」

ケンが意気揚々と村井の方を見る。清潔ガウンに着替えている村井がケンを見て頷く。

#### ○同・病室

入院患者の笹倉（75）が車椅子に座っている。部屋の前で立っている村井、八木、ケンの三人。

ケン「笹倉さん、入るよ」

笹倉が三人の姿を見て会釈する。無精髭で裸足にサンダル、サイズの合わないスクラブを身に纏っているケンが部屋に入ってくる。ケンは中腰で笹倉に視線を合わせてにっこり笑う。

ケン「笹倉さん、最近食事量少ないけど、どうしたの？」

笹倉「先生、あんま食欲ないの……」

ケン「そうか、なんか味が変わっているとかない？」

ケンと笹倉が話しているのを、ケンの後ろに立っている村井と八木が見ている。

村井「ケンさん、蘇生の時と全然顔が違うよな」

八木「患者さんに本当丁寧だね」

村井「でもヒゲとか服装どうにかしたほうがよいと俺は思う」

軽く笑う村井。

八木「確かに」

八木が笑い返している。

ケン「村井、なんか言ったか？」

後ろの村井を振り返るケン。

村井「あ、いやいや。なんでもないです」

村井が苦笑いを浮かべて誤魔化している

る。

○居酒屋・カウンター席（夜）

村井、ケン、八木の三人が横並びで座り、ジョッキでビールを飲んでいる。

ジョッキを飲み干し、幸せな表情を浮かべているケン。

ケン「やっぱ、久々の一杯は最高だな、覚知くんおかわり！」

笑顔でケンを見ている村井と八木。

居酒屋店員の覚知（35）が新しいジョッキをケンの前に置き、微笑みながらケンを見ている。

覚知「とかいって健介先生、一昨日も来ていたじゃないですか」

ケンが人差し指を唇にあてて、発言を遮るような表情で覚知を見ている。

村井「ケンさん、飲み歩いていて大丈夫なんですか？」

ケン「別に飲み歩いてないよ、俺は」

ジョッキのビールを飲み干すケン。

八木「確か、娘さんいらっしやいましたよ

ね？」

ケン「いるよ、15歳。反抗期なんか妙

に冷たいんだよ」

村井「ケンさん、もう少し清潔感出した方が

……」

冗談半分の表情でケンを見る村井。

ケン「なんだよ、村井。俺が汚いっていうの

か？」

八木が苦笑いで村井とケンのやりとり

を見ている。覚知がケンの前に焼きそ

ばを置く。

覚知「これよかったらみんな食べて下さい。

サービスです。健介先生、よく店に来てく

れるので……」

少し不機嫌そうな顔をしていたケンの

表情が緩みはじめる。

ケン「ありがとうな」

カウンターの少し離れているところか

ら、居酒屋店主の村上（50）が、覚  
知に声を掛ける。

村上「覚知、これ3番に持って行って」

覚知「はい、承知しました」

村上の方を振り返り、愛想良く返事を  
する覚知。覚知はケンに会釈してその  
場を離れる。

○同・玄関先（夜）

外に出た村上が玄関先に掛かっている  
『営業中』の札を裏返して『支度中』  
に変えて中に戻る。

○同・カウンター席（夜）

カウンターの机に顔を伏せて寝ている  
八木。村井とケンの目の前には焼酎の  
ボトルが置かれており、二人は水割り  
を飲んでいる。

ケン「なあ、村井も八木も本当成長したよ：  
…」

村井「急にどうしたんですか」

少し怪訝そうな顔でケンを見る村井。

ケン「俺たち出会って何年になる？」

村井「まあ、10年くらいですよ。俺が三年目の時だから。その時、指導医だったケンさんめちゃくちゃ怖かったです」

村井が軽く笑いながら、ケンを見る。

ケンが少し恥ずかしそうな顔で軽く

村井を小突く。

ケン「なあ、村井。今から10年後の俺らの世界ってどうなっていると思う？」

村井「技術が進歩して、助かる患者や治る病気も増えるんじゃないですか？ 僕ら救急医の仕事も減りそうです」

村井が横目にケンを見る。ケンが頷きながら村井を見返す。

ケン「確かに技術は進歩して助かる患者や治る病気が増えるかもな」

ケン「その一方で高齢化は進み、次第に病院に通えなくなる医療難民が増えてくるだ

ろうな。具合が悪くなって、救急搬送されてきた頃には、手の尽くしようがないとか、俺らの処置で望んでいない延命に繋がる患者もいるかもしれない」

グラスの水割りを飲みながら、静かにケンの話を聞いている村井。

ケン「俺、訪問診療所開こうと思っているんだ」

村井「ケンさん？」

ケンの発言に驚いた村井はケンの顔を見つめるが、ケンの目の奥に宿る固い意志を感じ取る。

ケン「病院になかなか通えない患者さんの体と向き合って、なるべく救急搬送を減らしたり、お前らの負担を少しでも軽くできなかったらな」

寝ている八木を優しそうな表情で見ているケン。

ケン「まあ、でも一人ってのは心細いよな、正直」

ケンが微笑みながら、村井の方を見る。

ケン「もしよかったら週一でも良いから、手  
伝ってくれないか？」

村井「俺ですか？」

ケン「まあ、知っていて信頼できる後輩にし  
か頼めないのよ」

ケンが優しく村井の肩を叩く。

○訪問診療所・玄関先

T「半年後」

玄関先に立て看板を立てかけている村  
井。立て看板の表記は村井の後ろ姿で  
見えない。

○同・オフィス

デスクに座って事務作業をしているケ  
ン。オフィスに段ボールを運んでくる  
村井。診療所アシスタントの北島美佳  
(38)が申し訳なさそうな表情で

村井の顔をみて、段ボールを受け取る。

北島「ごめんね、村井先生。せっかく来たのに雑用みたいな事させて……」

村井「いえいえ、まあ出来たばかりですし……」

村井はデスクに座っているケンを見ている。

北島「院長、この先大丈夫ですか、この診療所？」

北島が心配そうな表情でケンを見る。

ケン「美佳ちゃん、大丈夫、大丈夫。そのうち患者が増えてくるから」

北島「院長、美佳ちゃんはやめて下さい、北島です」

段ボールを持ちながら、不満げな表情で座っているケンに近づく北島。

ケンが、若干焦った表情をしている。

ケン「わかったよ、わかったから……ごめんな、北島ちゃん」

北島「ちゃんはいらない」

呆れた表情でケンから離れていく北島。

村井がケンと北島のやりとりを微笑みながら見ている。

○同・玄関先

訪問診療所の立て看板を背に、ガラパゴス携帯を耳に当てて、会話をしている村井。

八木（声）「どうよ、ケンさんのところ？」

村井「……暇かな」

八木（声）「え、そうなの？」

村井「患者がまだあんまりいないのよね。あとは救急外来と違って、地味というか……」

八木（声）「そうなんだ、村井にとっては物足りないって感じ？」

村井「来月もこんな感じだったら、ケンさんに言っただけ辞めようかな……」

八木（声）「そうか……。あ、話変わるけど

村井、店予約取れた？」

村井「ああ、なんとか」

電話を耳にあてながら、微笑む村井。

八木（声）「よかったな！ 来月だろ、頑張れよ」

村井「ありがとう。じゃあな、また病院で」

電話を切る村井。

○同・オフィス

オフィスに入ってくる村井。ケンが電話をしている。会話が終わり、受話器を置いて村井を見る。

ケン「村井、新患だ。行こう」

村井がケンを見て頷く。

村井とケンの前に社用車の鍵を持った

北島が現れる。

北島「院長、私も一緒にいきましょうか？」

ケン「北島ちゃんは、大丈夫だよ」

ケンが北島から鍵を受け取ろうとするが、遠ざける。

北島「ちゃんはやらない。ぶつけないで下さ

いね」

ケン「大丈夫だよ、ほら」

北島が渋い表情をしながら、車の鍵をケンに手渡す。鍵を受け取るケン。

○車内・運転席

狭くて入り組んだ山道。ケンが運転しており、助手席に座っている村井。

村井「すごい所に住んでいますね……」

ケン「だよな、これじゃ通院は大変だな」

○西川宅・玄関先

玄関先に車が2台ほど停まっている。車を駐車するケン。

○西川宅・居間

広い座敷には長テーブルが置かれており、患者の西川カメ（75）、娘の西川直子

（50）、ケアマネジャーの松永苑子

（60）、介護福祉士の山崎香織（40）

が座っている。居間に入ってくるケン、

村井の二人。松永はケンの姿をちらりと見て、カメと直子の方に視線を移す。

松永「西川さん、こちらが訪問診療の先生」

腰を落としてカメと目線を合わすケン。

ケン「カメさん、よろしくお願ひしますね。

俺のことはケンさんで良いよ。こちらが村

井先生。カメさんの主治医」

ケンと同じく腰を落としてカメと目線を合わせる村井。

村井「村井と言います、よろしくお願ひします」

カメ「よろしくね、先生」

○西川宅・玄関

靴を履き替えて玄関の扉の前に立っている村井とケンの二人。

ケン「なあ、村井。俺たち訪問診療医っていうのは脇役だ。患者が主人公。彼らの物語を際立たせるために俺らがいる。カメさんのよろしく頼むぞ」

ケンが村井の肩を叩く。

村井「はい」

村井がケンを見て笑顔で頷く。

山崎「素晴らしい言葉ですね」

村井とケンが声の方を振り返る。

山崎と松永が立っている。山崎が名刺

をケンに手渡す。ケンが名刺をみると

『介護福祉士 山崎香織』と書かれて

いる。

松永「近いうちにケアマネの試験を受けるん

だっけ？」

山崎が頷く。

山崎「患者さんの悩みを聞いて、彼らの人生

をより良いものにできるようお手伝いし

たいと思って」

ケン「熱いね、山崎さん頼もしい」

笑顔で頷いているケン。

松永「熱いのは先生も負けてないわ、さっき

の人生会議とかすごかった……」

ケン「やめてくださいよ、恥ずかしい」

松永「私も膝が悪いから、通院できなくなつたら先生に診てもらおうかな」

玄関で談笑している村井、ケン、山崎、松永の四人。

○訪問診療所・オフィス（夕）

T「一ヶ月後」

土砂降りの雨音が聞こえる。

髪が濡れている村井が、タオルで髪を

拭きながらオフィスに入ってくる。デ

スクで北島が事務作業をしている。

村井「しかし、ひどい雨ですね」

北島「そうね、これから一時的に強くなるみ

たい」

村井「そういえばケンさんは？」

北島「まだ終わらないって、さっき連絡あつ

た」

村井「この一ヶ月以内で患者さん、増えてきましたもんね」

北島のデスクに置いてある電話が鳴る。

北島が受話器を取る。

村井がガラパゴス携帯の画面を開けて、表示されている時刻を気にしている。

北島「少々お待ちください……」

受話器を保留中にして、村井の方を見る北島。

北島「村井先生」

村井「どうしました？」

北島「先生の患者さんの西川カメさん。娘さんから今連絡があって、この三日間解熱薬を使っているみたいだけど、あまり下がらないみたい」

北島「娘さんは来て欲しそうだったけど……」

村井が自身のカバンを見つめて数秒考

えている。

村井「今晚は引き続き、解熱薬で診てもらいましょう。明日診にいきますと伝えてもらって良いですか？」

北島「……わかったわ」

○同・オフィス（夜）

髭を剃って清潔感の出たケンが、オフィスに戻ってくる。北島がうんざりした表情で事務処理をしている。

北島「おかえりなさい、院長」

ケン「北島ちゃんも遅くまでお疲れ様。患者

増えたから大変だよな、それでこの天気よ」

ケンがため息をついて席に座る。

何かを思い出したように、自身の鞆を

開けて、何かを探している。

○同・オフィス（夜）

事務処理をしている北島の視界の前に

ポップな字体で「診療アシスタント

北島 美佳」と書かれていた名札が

現れる。顔を上げるとケンが名札を

手に立っている。

北島「これどうしたんですか、院長？」

北島は思わず、軽く笑ってしまう。

ケン「最近髭剃ったら、少しは娘と仲良くな

ってな。診療所全員の作ってくれたんだよ」

ケン「たまには村井のヤツ、良いアドバイスするじゃない」

北島がケンを笑顔で見ている。

ケン「そういえば、村井は？」

北島「先帰りましたよ、少し急いでいたみたいですけど」

ケン「そうか。これ渡しといてくれないか？」

ケンが村井の名札を北島に渡そうとする。  
る。

北島「せっかくだから、院長が自分で渡せば

いいじゃないですか？」

ケン「頼むわ、俺無くしちゃいそうで……」

ケンと北島が、整理整頓されてないケンのデスクを見ている。ケンから村井の名札を受け取る北島。

ケン「ありがとうな」

北島のデスクの上の電話が鳴る。電話の受話器を取るケン。

ケン「もしもし……はい、そうなんですな

…今から伺いますので」

曇った表情のケンが会話を終えて、受話器を置く。

北島「どうしたんですか？」

ケン「ちょっと患者さんの家に行ってくる」

北島「私もいきます、こんな天気だし」

北島の顔を優しい表情で見ているケン。

ケン「北島さんは、書類仕事まだ残っている

でしょ？　すぐ戻るから大丈夫。まったく

村井のやつ、世話焼かせやがって」

北島はケンの発言に不思議そうな表情を浮かべている。ケンにはっこり笑い

北島を一瞥して外に出ていく。

○ホテル・レストラン（夜）

T「一時間前」

村井と村井の彼女の北川彩（33）が

テーブル席に向かい合って座っている。

ダイナーを楽しんでいる村井と北川。

外で稲光が鳴っている。

北川 「すごく美味しい。予約取るの大変だったんじゃない？」

村井 「まあね」

村井は若干、緊張した表情を浮かべている。

村井 「なあ、彩」

北川 「マサどうしたの？」

村井がポケットから指輪ケースを出し

彩の目の前で開ける。

村井 「彩、俺と結婚してくれないか」

彩が驚いた表情をしているが、その表情が徐々に緩んでいく。

北川 「……よろしくお願いします」

村井はにっこり笑う。

○車内・運転席（夜）

徐々に雨が止んできている。

狭くて入り組んだ山道。ケンが運転している。

○西川宅・玄関先（夜）

雨が再度、強くなり始めている。

車を駐車するケン。

○同・玄関（夜）

玄関のドアを開けて中にはいるケン。

カメの娘である直子が、ケンを居間に案内する。

○同・居間（夜）

布団が敷かれており、カメが呼吸荒く、寝ている。カメの横に来るケン。

カメ「ケンさん……」

ケン「カメさん、きつかったですね。もう大丈夫ですからね」

ケンがカメを見て頷く。診察を始めるケン。

○同・居間（夜）

カメが寝ている。ケンが抗生剤の点滴

の速度を調整している。直子はその光景を見ている。

直子「先生、母は大丈夫なんではないですか？」

ケン「おそらくおしっこの感染症だと思います。抗生物質が効いてくると思うので、安心してください」

直子「よかった……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～村井先生は？」

ケンが数秒下を向いて、考えている。

ケン「村井は別の患者対応中でして……：：：。村井からカメさんの往診の相談をされたんですけど、俺が解熱薬でいいんじゃないかって……：：：」

ケン「申し訳なかったです」

ケンがカメと直子の方向を向いて、深く頭を下げている。

直子「先生、とんでもないです。頭あげて下さい」

頭を下げたままのケン。

○西川宅・玄関先（夜）

雨と風が強くなっている。足早に車に乗り込むケン。

○車内・運転席（夜）

視界が悪い中、運転しているケン。  
ラジオから注意報が流れている。

○山道・崖（夜）

不安定な土砂が積もっている。

○北川宅・玄関先（夜）

村井の運転する車が停まる。

北川が助手席から降りる。運転席から北川を笑顔で見送る村井。

村井が、ガラパゴス携帯を開くと、ケンからメールが届いているのに気付く。メールを開封する村井。メールの文面には、『カメさんの往診してきた、次からは頼むな』と書かれてある。申し訳なさそうな表情を浮かべた村井はケ

ンに電話をかけるが応答はない。直後に着信がなる。携帯の画面に『北島さん』と表記されている。

村井「もしもし」

北島「もしもし、村井先生」

村井「どうしました？」

北島「院長が連絡つかないんだけど、何か知っている？　なんか往診行くって言ってだいぶ経つんだけど……」

村井「僕も電話繋がらなくて……」

何かを思いついた表情をする村井。

村井「北島さん、ケンさん往診いくって言うていたんですよね？」

北島「そうよ」

村井「今から診療所行くんで、合流しませんか？」

○車内・運転席（夜）

雨が止んできている。山道を運転している北島。助手席に乗っている村井。

北島「幸い雨は止んでるけど、すごい道ね」

村井「ですね：：前初診で院長とこのルートを通ったんです」

村井が山道の脇の木に衝突して前方が半壊している車を見つける。周りには土砂が散らばっている。

村井「北島さん、あれ：：」

村井はなんとなく嫌な予感がする。

北島も村井の表情から察する。

北島「停めるわ」

北島が車を停める。

○山道・事故現場（夜）

村井が車から降りる。

村井が周囲の安全を確認しながら、事故車に近づき、運転席をおそるおそる覗く。フロントガラスが割れており、運転席で頭から血を流して意識不明のケンがいる。衝撃を受ける村井。

村井「ケンさん、しっかりしてください！

ケンさん！」

北島「うそ……院長」

村井の後方で呆然と立ち尽くしている

北島。北島の方を振り返る村井。

村井「北島さん、救急車呼んでください」

北島が村井を見て頷く。

村井は運転席の扉を開けて、ケンの頸

動脈に触れるが、ガラスの破片が付着

しており、右手親指の付け根を切って

しまう。

○前田救命センター・ステーション（夜）

救急車受け入れの電話が鳴る。受話器

を取る八木。

八木「はい、前田救命センター」

八木が救急隊と電話でやりとりをして

いるが、その表情が徐々に曇っていく。

○同・初療室（夜）

村井が頭元で換気しながら、救急隊員

A、救急隊員Bとストレッチャーに乗っているケンを運んでくる。看護師A（40）と看護師B（35）が救急隊員と協力して、初療室のベッドにケンを移し替える。看護師Bがモニターをつけて血圧測定を始める。看護師Aがケンの右腕に静脈路を確保している。

村井「八木、頭部外傷で脳ヘルニア起こしていると思う」

八木は村井の右手親指付け根あたりに巻かれた血が滲んでいるタオルを見る。

八木「大丈夫か？」

村井「ああ」

村井を見て頷く八木。

八木「挿管したらCT行くよ、オペ室の手配お願い」

八木はフロア全体に呼びかけた後、看護師Bを見る。八木を見て頷く看護師B。ケンの胸に超音波を当て始める八木。

○同・初療室（夜）

初療室の救急カートの上に挿管の物品を急いで並べている村井正和（35）。村井は焦った表情をしている。ケンが寝ているベッドの足下で薬剤のシリンジを握っている八木。八木が村井に目をやる。

八木「いけるか？」

村井が八木を見て頷き、喉頭鏡を持って患者の頭元に移動する。目が泳いでいる村井。

○同・処置室（夜）

曇った表情で椅子に座っている村井。村井の右手付け根の傷の縫合をしている八木。

八木「そういえば、どうして村井と一緒に？」

村井「ケンさん、俺が経過観察していた患者の往診に行つて、帰りに事故に……」

村井が下を向いて頭を抱えている。

村井「俺のせいだ！」

八木「村井……」

村井をなんとも言えない表情で見ている八木。

○同・初療室（夜）

初療室の入り口に立っている村井。

入り口に落ちている名札を見つけて捨

う。名札についた血を拭き取る村井。

名札には「高井 健介」と書かれてい

る。八木が入り口付近に現れて、村井

に声をかける。

八木「家族来たって。俺が話そうか？」

村井を気遣うような表情を見せる八木。

村井「大丈夫」

村井が面談室に向かって歩いていく。

心配そうな表情で村井の後ろ姿を見て

いる八木。

○同・面談室（夜）

面談室には、ケンの妻である高井夏美（41）、娘の高井玲奈（15）が緊張の面持ちで座っている。ドアを開けて入ってくる村井。村井の方を見る夏美。

夏美「父が事故にあって、運ばれてきたって」

村井「はい……」

村井が机の上にケンの名札を置く。

村井「お父さんは、脳出血を起こしていて、危険な状態でした、今脳外科の先生が緊急手術を行なっています」

玲奈が机の上に置かれている、ケンの名札を思わず手に取る。

玲奈「お父さん、そんな……」

夏美と玲奈が泣き崩れている。村井がなんとも言えない表情で面談室の壁を見つめている。

○訪問診療所・玄関先

訪問診療所の玄関先に、「高井訪問診療所」の看板が立っている。村井が看板を見つめている。

○同・オフィス

村井が看板をテーブルの上に置いて、そばに置いてある白い塗料、黒い塗料のペンキ、刷毛を見ている。高の字を白い塗料で塗りつぶしていく村井。

（回想終わり）

○伊祖療養病院・病室

気管切開チューブに人工呼吸器が繋がっているケン（55）が寝ている。ベッドの頭元には高井健介のネームプレートがある。ケンの姿を見ている村井。病室の入り口に高井（30）が現れる。

高井「いらっしゃっていただきますね」

高井「最近父の見舞いに来てくれるのは、村

井先生くらいですよ」

高井がケンのオムツなどの消耗品を抱えて、戸棚を開けてしまっている。

村井「ケンさんとは、長い付き合いだからね」

高井「本当いつもありがとうございます」

高井が村井に頭を下げる。高井をなんとも言えない表情で見ている村井。

○同・玄関先

ベンチに座って缶コーヒーを飲んでいる村井と高井。

高井「町田先生、頑張っていますか？」

村井「うん、楽しそうにやっているよ」

高井「よかったです。うちにいた時の町田先生、顔死んでいたんで」

高井は軽く笑っている。

村井「高井さんは最近どう？」

高井「もうすぐフライトナースの研修がはじまるんです」

村井「ドクターヘリか、すごいね」

高井「フライトドクターだった父への憧れからずっと目指してきたんで」

一息ついて話し始める高井。

高井「八木先生から、父が事故にあった日、

村井先生が駆けつけてくれたって」

高井「父が生きていて、村井先生には本当感謝しています」

村井「高井さん……」

高井を複雑な表情で見ている村井。

高井「私、夜勤なんで失礼しますね。コーヒ

ーご馳走様でした」

立ち上がり、村井に軽く会釈して立ち去っていく高井の後ろ姿を見ている村井。

○村井訪問診療所・玄関先（夕）

村井訪問診療所の立て看板が立っている。

○同・オフィス（夕）

村井がデスクで作業をしている。

目の前に現れる町田翼（32）。

町田「院長」

村井が顔を上げる。

村井「町田先生、どうしたの？」

町田「この前の赤田さんの往診、行ったら具

合相当悪くて……なんとか点滴始めて今は

元気になっています。ありがとうございます」

村井「よかったじゃない」

町田「はい」

自分の席に戻る町田の後ろ姿を見てい

る村井。五十嵐隼人（28）のデスク

に置いてある電話が鳴る。受話器を取

る五十嵐。

五十嵐「はい、村井訪問診療所です。……わ

かりました……」

受話器を保留中にして、町田の方を見

る五十嵐。

五十嵐「町田先生、酒井さんが熱出して

て、具合悪いみたいです」

町田「五十嵐くん、行こう」

五十嵐が頷き、保留中を解除する。

五十嵐「わかりました、今から往診に行きま

すので……」

町田と五十嵐が診療バッグを持って、

オフィスを出ていく。出ていく二人

の後ろ姿を、優しい表情で見ている

村井。

○酒井宅・洋室（夕）

苦しそうな表情を浮かべながら、酒

井八郎（90）がベッドに寝ている。

洋室の扉の前に立っている娘の酒井

美世（65）が心配そうな表情で、

八郎を見ている。

静脈路を取って点滴を繋げて流し始

める町田。血圧測定をしている五十

嵐。

五十嵐「収縮期血圧、70しかないです」

町田が、るい瘦著名な八郎の姿を見

ている。町田が美世の方を見る。

町田「お父さんは、なんらかの感染症を発症  
していて、病院で治療した方が良いかもし  
れませんが」

五十嵐がパソコンで紹介状の下書き  
を作っているのを、町田がちらりと  
見て、美世に視線を移す。

町田「前話していた、治療コードの内容って  
覚えていますか？」

美世が町田を見て頷く。

○前田救命センター・ステーション（夕）

山田（29）が救急車受け入れの電  
話の受話器を持って話している。会  
話が終わり、電話を切る山田。新井  
（29）が清潔手袋を外しながら歩  
いてくる。

山田「新井、新患来るって」

新井にボードを見せる山田。

新井「もう勘弁してよ。また超高齢者じゃ

ん。どうせ治療コードとか話し合われていないんだろ」

うんざりした表情をしている新井。

○同・初療室（夕）

ベッドの上に寝ている八郎の血圧測定をしている高井。山田が超音波検査をしている。入り口に立っている新井に美世がおそるおそる声をかける。

美世「あの……娘の美世ですけど」

新井「娘さんですか？」

美世「主治医の先生にこれを渡すようになって……」

美世が封筒を新井に見せる。封筒を受け取る新井。封筒には「診療情報提供書 村井訪問診療所」と書かれている。ハツとした表情を浮かべた新井が、封筒を開けて中に入っている情報提供書を取り出す。情報提供書を開くと、右上の差出人に町田翼と書かれている。

新井「先輩……」

本文の最後には、治療コードの記載が  
されている。横から覗いて紹介状を見  
る山田。

山田「すごいな、町田先生。こんなしつかり  
書かれている提供書、見たことない」

新井「だよな」

感心した表情をしている山田。

新井が笑顔で美世を見る。

新井「主治医の先生が、事前に治療方針を事  
前に話し合ってくれていたので助かりまし  
た。あとは任せてください」

美世「よろしく願います」

○町田宅・居間（夜）

町田が座って、パソコンの画面を見て、  
フェントステープのイーラーニングを  
受けている。町田のスマホの画面にラ  
インのメッセージが届く。

○居酒屋・カウンター（夜）

カウンターに座ってジョッキでビールを飲んでいる町田。玄関の扉の鈴の音が鳴る。外科医の石原翔（37）が店内に入ってくる。町田の姿を見つけて、町田の左隣に座る石原。石原の顔をみる町田。

町田「久しぶりです、翔先輩」

石原「久々だな、町田」

石原に声を掛ける覚知（55）。

覚知「お客さん、何にする？」

石原「赤ワインありますか？」

覚知が石原の顔を見て頷く。

○同・カウンター（夜）

町田と石原がお酒を飲んでいる。

町田「翔先輩、最近戻ってきたんですけどっけ？」

石原「ここ半年前くらいかな。やっぱりアメリカ留学はすごく勉強になったよ」

町田「相変わらず、すごいですね」

石原「そう言えば、風の噂で聞いたけど、町田は訪問診療やっているって？」

町田「はい」

石原「またどうして？ 救急医としてバリバリやってたじゃない？」

町田「鈴木舞って覚えていますか？ サークルで俺と同期だった」

石原「ああ」

石原が軽く苦い表情を浮かべている。  
町田が自分の発言に後悔する表情を浮かべている。

町田「忘れていました。確か付き合っていましたよね？ すいません」

石原「もうだいぶ前に別れたよ」

町田の方を叩く石原。

町田「鈴木に『医療が患者の人生を決める世界だけじゃなくて、患者の人生で医療を決める世界もある』って言われて……」

石原「なるほど」

石原がグラスの赤ワインを飲み干して

一呼吸置いて、町田の方をみる。

石原「町田、本気でそう思っているの？」

町田「え？」

石原「医者って知識や技術を磨いて、目の前の人を救うのが仕事じゃないの？」

石原「それで、彼らの人生が作られていく。

それが俺らの仕事だと思っただけだ

町田「まあ、翔先輩の言う通りだと思います

……。ただ、末期癌や超高齢患者の治療コードが彼らの人生観を元に話されていないことが多いですか？」

石原「治療コードね」

石原が頷いている。

石原「確かに大事だと思うけど、町田は治療コードを決めるのは怖くないの？」

町田「どういう意味ですか？」

石原「超高齢者に人工呼吸器などの侵襲的な治療を延命になるからって、よく救急医が言っているけど……」

石原「町田、延命治療って回復の見込みがないっていうのが前提だろう？」

町田「そうですね」

石原「誰一人として同じ患者はいない。その患者が回復するか、しないかなんて、本当は誰も分からないんじゃないの？」

町田が黙って聞いている。

（回想はじめ 二週間前）○酒井宅・居間

町田と五十嵐、テーブルを挟んで、美世が座っている。

町田「お父様の主治医の町田です」

美世「よろしくお願ひします」

町田「お父様は度重なる入院で、認知機能や身体機能の低下もあり、通院が困難と伺っています」

美世「ええ……最近どんどん弱ってきて」

町田「そのようなお姿を見るのは辛いですね……」

一呼吸置く町田。

町田「僕ら訪問診療は、お父様の人生観や思いに対して適切な医療を提供していけたらと思います」

町田「お父様の生きがいつてなんですか？」

美世「父はテレビを観たり、孫の顔をみるのが好きで」

町田が頷いて聞いている。

町田「年齢も年齢ですし、逆にこうなったら生きていたら意味がないっていう考えはありそうですか？」

美世「父は集中治療室に何回か入院歴があった。その度に乗り越えてきたんだけど、寝たきりでいろんな管が繋がった状態で人生を終えるのは嫌だった」

町田「そうなんですネ……」

町田「お父様は、年齢も重ねてきていますし、今度、集中治療室に入ることがあれば、人工呼吸器の管や、いろんな管が繋がれたまま、一生を終えるかもしれませんね」

町田「治療コードとしては、人工呼吸器を含

めていろんな管を繋げる治療じゃなくて、本人にできるだけ負担のかけない治療をしていきませんか？ 必要であれば緩和治療への切り替えも選択肢かと思います」

美世「そうですね、先生それをお願いします」

町田が美世を見て、頷いている。

（回想終わり）

○居酒屋・カウンター（夜）

石原「人生観を元に治療コードを決めるって、実は俺たち医者が、患者の人生を勝手に制限しているだけじゃないの？」

下を向いてなんとも言えない表情の町田。

（第八話 「葛藤」 に続く）